フラスコの魔法使い

もう振り向かず歩いてゆけるさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フラスコの魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ６０６４Ｏ

【作者名】
もう振り向かず歩いてゆけるさ

【あらすじ】
なんも、起きるはずねーと思っていた。
それは、平和の渦の中にずーっと長くいたからだと思う。

『なにを見た？』

ずっと、俺の人生は、この瞬間をまっていたのかもしれない。
あの研究服の女にぶつかる、あの瞬間を…。

「全てが変わる、この瞬間を」

平和な俺が平和じゃねーアホと繰り広げるＳＦ物語っ！！

1章：狂った科学者？笑わせる。（前書き）

結構、続き書いてません。
なんでしょうね、、まぁ頑張ります。
警告：特にないけどなw

1章：狂った科学者？笑わせる。

「マズいぞ……実験が「奴ら」にバレた！！」
白い研究服に身を包んだ怪しい七人は、薄暗いこの部屋の僅かな光源であるパソコンモニターを見て焦っていた。
「世紀の大発明だぞ！「奴ら」が来る理由がわからん！！」
と一人の研究者が叫ぶ。
それを、隣にいた長髪の研究者が宥めた。
「だからこそ…なんだと思いますよ。……ふー…どうします？」
長髪の研究者はため息を漏らすと、部屋の「奥」に居る一人の研究者に尋ねた。
その「奥」にいる研究者はニヤリと不敵な笑みを見せると、一言。
「逃げるぞ」
7人の研究者は、それぞれの反応を見せ、その場からスッと消えてしまった。
「ククククク…燦（さん）には悪いけど」

「イカれた科学者め…」
「どこにもいません…完全にロストしました」
「ちっ…マギックだけでも回収しろ」
「はっ……」

平凡な奴は、贅沢な悩みを抱えているものだ。現に今、俺はまさにそれを抱えている。
「学校いきたくねー…」
学校なんていう教育の場にわざわざ自分から行くなんて馬鹿げて

いると思わないか？
そら、勉強意欲がある奴や、まあ色々は、学校に行きたいなんて血迷ったことを考えるのだろうぜ？
でも俺は違う。
リアルが充実していない。
「つまんねーよ…」
とか、色々言いながらも、結局は学校に行くんだ。
こんなことを小学校から続けて、今高校だが、大学に行っても変わる気がしない。
「第一よおー、先生の話がつまんねーよ。アイツら焦りすぎなんだよ。生徒の好感度上げるためにせっせせっせと健気なもんだよ」
まあ、そんな先生もいるって話である。
この男、天城　奈留の得意技は「偏見」である。
紺のブレザーに灰のズボンと、どこにでもありそうなありふれた制服を着て、肩には有名なスポーツ用品会社のマークが入った、スポーツバックをかけ、ぼさぼさ頭のまま通学している。
こんな男がリアル充実できるはずないのだ。
まったくの、自業自得という奴である。
「はぁ…寒っ……学校行って、暖房の恩恵でも受けながら、寝るとするか」
そんな感じで、いつもの日常は訪れるわけである。

「はぁはぁ……マズいわ…大変マズいわっ」
うぉっと…っ！
躓き、転びそうになった。
おはようございます、こんにちは、こんばんは。私の名前は　浅瀬　燦（さん）。２１歳、独身！彼氏募集中だぜっ！
まあ、あの馬鹿共を退治してくれるのなら、結婚を前提にお付き合いしてあげてもいいわ。

え？プロフィールが欲しいって？もんっ仕方ないんだからん（はぁと
髪の色は、茶色
瞳の色は、実験の成果（失敗）により、左は黒、右が青になっちゃいました（笑）
１６８ｃｍで、おしゃれがしたいお年頃っ！イエイ！
んでも、今は白い研究服に身を包み、帽子をぐっと深くかぶってます。

「アホかっ！帽子で顔見えなくとも、街中研究服着てりゃ嫌でも目につくわ！！」
と追跡者からきつい一言。
しかし、浅瀬　燦は馬鹿ではない。
「馬鹿なっ……！？盲点だったわ…」
天然である。
この女、浅瀬　燦の特性は「天然」である。
天然が科学者なのだから、奇跡は確かに存在するらしい。
「帽子じゃ…駄目だとっ…？……つかまるしか…ないわ…」
ズドーンと、燦は逃げる足をとめ、四つんばいになった。
その数秒後、追跡者達が上からスタタっと綺麗に堕ちて来た。そこだけ見ると、忍者のようである。
追跡者の数は三十。
一人の人間を三十人で追いかけてきたのだ。
しかも、完全装備である。
メタリックな防具を、手や足、頭、腹、胸につけ、黒いサングラスのようなものをかけ、目を隠している。
右手には、拳銃を、左に手には棒を、腰にはランチャーの小型版のようなものをつけている。

「帽子以外策がなかったのかよ…」

と、一人の追跡者が呆れた声で言った。
燦は、無言のまま四つん這いになったままである。
（言い返せないことが悔しい…っ！）
つまり、策がなかったのだ。
「まぁおかげで「科学者（マッドサイエンティスト）」の内一人を捕まえられたのだから感謝だな」
と一人の追跡者が言った。
すると、他の追跡者が笑う。
「馬鹿で助かったなー、完全装備してきて損したわ」
「だなー、無装備でも私服でも全裸でもいけたなこりゃ」
「馬鹿、全裸は色々とマズいだろっ」
どっと笑いが起こる。

（くっ…調子に乗りやがって！）
しかし、言い返せない。
「科学者（マッドサイエンティスト）」は八人いるわけで、七人は完全に見事に華麗に逃げたのだ。
だから、追跡者も完全にロストしたと思っていた。
思っていたのだ。
しかし、索敵網を広げてみれば、あら不思議

「浅瀬　燦。お前、よく「科学者（マッドサイエンティスト）」なんかになれたな」

浅瀬　燦が見事に引っかかったのだ。
なぜなら、彼女の特性は……「天然」だからだ。
「天然」な彼女が一人で上手に逃げれるはずがないのだ。仲間もそれを知っていただろう。しかし、自分達が生き残るには…
（一人の犠牲ぐらいいいってか！！）
そういうことである。

「さーて、浅瀬　燦は馬鹿だが、コイツも一応「科学者（マッドサイエンティスト）」だ。データによれば、マギックのデータ作成はコイツが行ったらしい。早めにお縄頂戴よろしくっ！！　つーことで、捕まえな」
「りょーかーい」
と一人の追跡者がだるそうに、燦に近づいてきた。
（……馬鹿馬鹿バカバカバカバカバカ…バカバカバカ馬鹿バカバカバカばかばかばかばかばかばかばかばかばか！！！！！！）
「…ばかばかばかばか…」
ぶつぶつぶつぶつ
「ん？」
と近づいてきた、追跡者が訝しげな目で燦を見た。
「何をブツブツいってやがる…？」
その追跡者は、チャキっと金属音を鳴らし右の拳銃を構えた。
いくら、馬鹿でも「狂った科学者（マッドサイエンティスト）」である。警戒はする。
「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿…ばかばかばかば……ばかばかばかばか言いやがってーーーーーー！！！！！！！！！！！！」
浅瀬　燦がきれた。
後ろで見ていた、追跡者もいきなりスイッチが入ったように、拳銃やランチャーを構え、その銃口を燦に向けた。
燦は、それを見てニヤリと笑う。
銃のことなど、気にせず、すっと自然に彼女は立った。
「フフフフフフ、なめてるでしょ？アンタ達」
と浅瀬　燦の一言でございます。
「アンタ達も知ってるとーり、私は、マギックのデータを作成した研究者よ……？」
ゴクリと、追跡者達が生唾を飲む音が聞えた。
燦は、ニヤリとまたしても不敵な笑みをみせ、片腕をポケットにつっこんだ。その瞬間——

『ずきゅーん！！！』

「ポケットから、手を抜け」
追跡者からの威嚇射撃が来た。
素直に燦はポケットから手を抜く。
あるものを握って。
「アンタ達の、敗因を挙げるなら、こうね！！さっきの威嚇射撃を私に当てるべきだったわ！！！アハハハハハハ！！」
グニョリ！
という音が鳴った気がした。
「なんだ……？」
燦が出したのは、時計である。懐中時計である。
しかし、この懐中時計…タイムマシンなのであった。
「時間設定は、八年前！空間設定は、ここ！！　じゃ～ね～ん♪」
そういい残すと、燦はその場から、グニャリと消えていった。

「……隊長、逃がしましたね…」
「だな」
「しかし、浅瀬　燦…馬鹿ですね」
「だな」
「時間も、空間も教えちゃって…。この時代でタイムマシンもってない団体なんて、無いに等しいのに」
「だな」
隊長と呼ばれた男は、二十九人の隊員の前に出ると
「じゃー、我々も時間設定八年前、空間設定ここで、移動するぞー」
「「「「「らじゃー」」」」
そういい残し、三十人の完全武装集団はグニャリと消えていった。

1章：狂った科学者？笑わせる。（後書き）

今度こそは、とか頑張ってみようかな。
どうも、「もうｒｙ」です。
ＳＦというか、まあ、、なんでしょう。ギャグでは、、ないんですよね。
なんというか、全体的にどうしたいかなどは、まだ決めておりませーん。ただ、急に思いついたものなので、まぁなんでしょう。
全部読んでいただいた人、ありがとうございます。
これから、読む人、全部読んでくれたら嬉しいかなｗ

2章：一般人？踏み入れる。（前書き）

前書きって、どうしようか…。
えっと、まー、主人公がー、、踏み入れます。
楽しんで見てくれるとー幸いです。

2章：一般人？踏み入れる。

だから言ったのだ。
遠まわし？言ったのだ。
学校はロクな所ではないと。
あれほど？言ったのだ。
「自分は良い先生とでも思ってんのか、あのハゲ豚は」
何が気に食わないって、生徒に媚びうるとこが気に食わないね、俺は。
先生って職につくと自分に盲目になっちまうのかね？
お前の中にお前はいなくなっちまうのかね？
「たっく……」
そんな、言っても仕方のないことを、若干変態気味にブツブツと独り言を漏らしながら、帰宅路についてるわけである。
天城　奈留のデフォルトスキルは「独り言」なのだ。
「当たり前なのかね、つまんね」
先生が生徒に媚びをうるなんてことは、存外他校でもあることだろ？（知らないが）
これが当たり前。
そういうことか？
偏見なのだが。

「つまんね」

はぁ、と漏れるため息は、平和からくる贅沢なものだった。

「なんでっ！？……アイツらもタイムマシンを！？」
嘘でしょ…？
時間移動してすぐのことだ。燦本人が作った時間跳躍、懐中時計のタイムマシン
が反応したのだ。
長い針がぐるぐると周り、時間跳躍を知らせる。
壊れていることなんとことは、万が一にも有り得ない。
（計算は完璧…最高の逸品、壊れる？たった一回の時間跳躍で？有り得ない有り
得ない有り得ない有り得ない有り得ない！私だって科学者よ！？有り得ないことな
んか信じない！微塵も信じない！！）
自然に、考えられるのは、結論がくるのは、敵も時間跳躍したこと以外がない。
科学者以外（マッドサイエンティスト）がタイムマシンを持ってるなんて……。
いや、まてよ？
考古学者（アールキオロジスト）と和解交渉するときに、タイムマシンをあげたんだっけ。
確か、あれは五年前の話ね

1、考古学者（アールキオロジスト）と追跡者（プルソーア）はつるんでいる。

2、考古学者（アールキオロジスト）は追跡者（プルソーア）にやられた。

単純にニ択にした。
（どちらも考えられる…っ）
まったく、根拠というものが、証拠というものが、予想というものが燦にはでき

なかった。
科学者(マッドサイエンティスト)は装備類に強い。
しかし、世の流れには極端に弱いのだ。
五年前の考古学者(アールキオロジスト)和平を最後に、外部とのコンタクトは一週間前以来である。
（どうなってるのかは、わからない。私の計算は「必ず」なんだから、向こうも
タイムマシンを持っていると考えるのが妥当！！）
僅か数秒で行われた、思考計算である。
燦は、＝答えを瞬時に導き出すと、素早く近くの建物の中に隠れた。
その過程で誰
かにぶつかったな。「悪いね、コッチは急いでんのよ」と口に出す
余裕なんか無
いわけで、心の中で謝った。一般人には攻撃しないから、アンタは
安全ね…まぁ
、危なくなったら逃げるでしょ、悪いけど、私、一般人に気を配る
優しさもなけ
れば、余裕もないのよ。
その建物は、ドアを開けてすぐに上に続く階段がある。
それ以外はなにもない。
燦は、迷わず階段を駆け上がった。
戦略を、策を考えるなら、周囲に隠れるものが何もなく、しかも見
晴らしの悪い
建物の中は最悪である。
駆け上がり、コチラから見え、向こうからは、見づらい立ち位置に
つくことが重
要になる。
「はぁはぁ、たっく！」
燦は、右手の懐中時計を見ながら駆け上がった。
懐中時計の長い針は、速度を増して回っていた。

チチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチ
チチチチチチ
チチチチチチチチチチチチチチチチチチチ

「やっべーわ…」

もはや、苦笑いしかでてこない。
五階、屋上。
見晴らしは最悪。

「うぉっ…」

俺は見た。
ソイツは偶然見れたもんだ。というか幻視幻覚だと信じたい。

帰宅途中のことだ。
太陽光が、周りのビルに遮られた陰気臭い路地裏を近道として使っている俺である。
ここは、ビルが密集していて、ビルとビルの隙間の道が簡単な迷路のようになっているのだ。簡単と言っても、初めての人は流石に迷う。
まあ俺には関係のないことだけどな。
俺は、迷わずスタスタと右に行ったり左に行ったりと、やり尽くした迷路のゴールにむかって進んでいった。
「明日、学校休もうかなー」
なんで学校のこと考えると、こんなにも憂鬱になんのかね？

と俺は不思議に？いや、わかっていることを疑問形にしてやる気をマイナスさせた。
学校嫌。マジ嫌。
と、まあいつものようにくだらないことを考えながら、迷路を突き進んでいた俺は、

ドンっ！

「あ？」

誰かにぶつかった。
ぶつかってきた相手は、振り返り謝罪もせずに猛ダッシュ。
近くのビルの扉を凄い勢いで開け、これまた凄い勢いで閉めた。

バンっ！

という扉を閉める音の次に

カンカンカンカンカンカンカンカン！！
と階段を駆け上がる音が聞こえた。
あまりにも、突然だったので俺はしばらく、ぶつかってきた奴が入ったビルの扉をポカーンと眺めていた。

（実験服…？白衣？医者かね？）

多少、イラッとは来たが、今はもうなんも。
「急患かねー？大変だ」

医者にはぜってーならねー。
再び、歩を進める。
数歩歩くと、右側に開けた空間がある。
開けたと言っても、ざっと8畳ぐらいだ。
今俺が歩いている通路は人が二人ギリギリで並んで歩ける程度の狭さ。
だから、さっきの衝突は結構痛く、転びそうにもなった。
俺はツカツカと歩き…

「え…？」

奇怪な現象を見た。
8畳ほどの開けた空間は、ビルによって構成された、妙に奇跡的な空間だ。
端っこには、青いゴミ箱がおいてある。
それ以外は灰色が広がっている。
その灰色が一瞬、青に見えた。バックにある灰色の背景に無理矢理混ぜられる青
色、それは一瞬ではなくなった。
グニャリ……グニャグニャグニャグニャグニャグニャグニャグニャグニャグニャグニャグニャ。

「あ……？」

ポカーンと、いや違う。
ヤバい。
わけのわからない、あれはマズい。
何がマズいかはわかんねぇ。
だが、本能が…防衛本能が告げている、叫んでいる。

「離れろ！！」

と。

燦が言えば、奈留はこんなことはしなかっただろう。

奈留は、グルリと振り向き、そのまま走り出した。

前に向かって走り出していれば、巻き込まれなかっただろう。しかし、前に走る

ということは―、

（ありえねぇ、あの前を通ることはありえねぇ！！）

駄目だ…間に合わねー。

そんな気がした。

間に合わねぇよっ！！

どこでもいいや、姿を…身を隠さなきゃ。

どこかの扉を開けたんだ。

ヒンヤリと冷たい鉄のノブをひねり、扉を開け、隠れるものが何もなくて、目の

前にある上り階段を駆け上がった。

「あぁ…どうしよう」

時間跳躍でとりあえず逃げるか？という策は一秒で却下した。向こうも同じ物を

持ってるなら、結局は鬼ごっこした後捕まるのは明白だからだ。

「マギックを…」

それも却下だ。

マギックは1人1つしか埋め込めない。
逃げるマギックは確かに存在するが…。
「専用機器がなきゃ外せないし…第一外したくないのよねぇ」
困った。
浅瀬　燦、最大のピンチかも。　捕まったら何されんだろね。
ハハハ。
笑えた。
皆、助けにきてくれるほど燃えた奴じゃないしな。
ハハハ…
「アハハハハ、ハハハハ…あははぁー……」
完全に詰んだ。
アタシは、知謀策略張り巡らせて戦えるほど、機転の良い奴じゃぁなかったって
ことねん。

ギィィ…

屋上のドアが開く音がした。
目の前にはビル。
ここは五階。
飛び移り不可。
どう考えても…

「完敗ね」

負けである。

ハッハッハッハッ！！
焦りが、緊張が、恐怖が、感覚が、得体の知れない何かが、俺を追いかけてくる
音がした。
ビルに入ってすぐのことだ、入った瞬間は何も聞こえなかった。しかし、二階に
つくころに少し冷めた俺の脳はほじくり出したのだ。
聴覚情報を。

「セン……を…せ」
「……けま…た。…ルに、……す」

ハッキリとは聞こえていない。それが、逆に俺を極度の緊張状態にさせた。
自分でも、足が動いている今まさにこの瞬間の状態があり得られないほど信じられない。
怖い…何故だ？
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖いぃぃぃぃぃぃ！！
さっきまでの気だるさなんて五年前に消えました。と俺に言われても俺は首を大
きく縦に振って信じただろう。

何に…追われて、何を見た？

わからないことが、一番怖い。
「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ」客観的に見る、もう1人の俺がいたとしたら、腹

を抱えて笑い転げるだろうさ。
まるで、犬のようだと。
鼻から自然と粘液がでた。
目から自然と水がでた。
口から自然と粘液がでた。
それを無意識に拭う俺がいた。まだ心に余裕があった。
四階につくころには、冷静さを少し取り戻した。
そして、すぐに後悔した。
建物に入ったことにだ。
袋のネズミ。
それでも、引き返すことはできない。
ならばどうする？

「前に進むっきゃない…っ！」
俺と結構熱い奴？
五階についた。
どうやらここが最上階らしい。次の上り階段が無いのを見れば一目瞭然である。
俺は、ゆっくりと鉄製のノブを捻った。
今更、焦っても仕方がない。という諦めからくるものが、俺の急かす脳みそ信号
にストップをかけたからだ。

何千回になるか、ドクンドクンという鼓動が、バクンバクンに変わる瞬間を燦は
味わった。
しかし、このシチュエーションは初めてである。

（くるか……？私のマギックは戦闘に向いてない。発明品で数人道連れにしてあげるわーよん）
冷や汗が噴き出す顔を無理矢理笑顔にした。

バクンバクン！バクンバクン！バクンバクン！バクンバクン！
見える。隙間から…扉の隙間から姿が覗く。
燦は、ポッケに手を突っ込み、発明品を…

（って……ねぇぇぇえ！？）

なかった。
死んだ。
私、普通に死んだ。
急いでたんでタイムマシンと数枚のマギックチップ以外もってきてないこと、完
全に忘れてた。
ガクンとうなだれ、あぁさようならと心の中で呟いた。

「あ……、び、びびったぁー」
「は？」

エンディング見てスタッフロール流れるかと思った私の人生が、伸びた瞬間だっ
た。

「え…君、」
「あ、そいや…」

「「さっきぶつかった奴！？」」

2章：一般人？踏み入れる。（後書き）

記号半角に・・面倒だから直してません。
すいません。
因みに、ここで出たーまぁ英単語で、紹介しますーねんっ♪

科学者　は、前から出てましたけど））サイエンティスト
マッドは狂ったつー意味ですね。

追跡者　プリソーア。これ、発音・・よくわかんねっす。勘弁してください。

考古学者　アールキオロジスト。ふむ。

ここに出るカタカナのふりがなは、全部僕の発音僕の感覚でふってるんですわよ。
まぁ、違和感があるならいってください。
以上。

全部読んでくれた方感謝の歌を捧げます。ラーラー。

3章：狂った科学者？怒ってる。（前書き）

前書きって、何かきゃいいのかいまだわかりません。
まぁ、、いいか。

3話目に突入しました。イヤッフー。
この次から戦闘…かな、まぁそういう予定です。
ながーくっ、戦っていきたいと思います。色々。

3章：狂った科学者？怒ってる。

「……アンタ…何してんの？」
まさか、追いかけて来た？
確かに、「何も見ていなければ」命の危機はない。と私は思ってたけど、この位
置はマズい。ヤバい。
くそ、少年を巻き込んだっ！
「…っ、あぁ、いや…別に？」
すげぇ綺麗なねーちゃんだな。金髪が綺麗だ。
外人かな？目が不思議な色を…。つか、なんで帽子を…まあ似合ってなくもないが
。
いや、そうじゃないだろ。
このねーちゃんを巻き込んだ…。

「とりあえず、こっから離れな」
とは言ったものの、おそらくもう遅い。
燦は、奈留の後ろにある扉を睨み、平然とした態度を装ってみる。
「ちがっ…アンタが離れたほうがいい」
と返ってきた。
……、コイツ…何か知ってるな？何か見たな？

「何を見た？」

ズンと、地球の重力が五倍増したような錯覚を奈留は覚えた。

「何を見た？」

何かを…見た。

厳密に言うと、見る前に逃げた。逃げる方向を間違え、追い詰められた。

「別に…」

すると、外人？ねーちゃんはニヤリと口角を吊り上げた。

「おい、君。こっち来な」

「……？」

手招きする、ねーちゃんに、吸い寄せられるように俺は素直に従った。

多分、ねーちゃんが綺麗だから、とかじゃない。と思う。

後ろから来る圧力に耐えられなかったから、だと思う。

後…二歩。

一…二！！

その瞬間、屋上の扉、勢いよく吹っ飛んだ。

バコーン！！

という、ものすごい音とともに、扉が風を切る音が聞こえた。

「あぁ…やだやだ」

燦はため息をついた。

燦をギリギリかすらない軌道に扉は進み、後ろにあるビルに激突した。

小規模だが、クレーターを作った。
それを合図かのように、３０人の武装集団が、次々と武器を構えて入ってきた。

「浅瀬　燦、鬼ごっこは終わりにしようぜ」

と一人の男が言う。
燦は苦い顔を隠すように無理矢理笑いながら
「板垣ィちゃーん。見逃してよん」
板垣　垣根。追跡者一部隊長。
オールバック。
コイツだけ武装無し。
理由、いらないから。

「嫌だよ…アホがぁ。ーマギック発動」

キィィィィン！！
板垣の身体が光った。
……マギック…？

「ボディアーマ。身体強化、肉体強化。反射神経強化。動体視力強化。筋肉強化
」
と板垣　垣根がぶつぶつと呟いていく。
あら…。
キィィィィンと輝く板垣の身体が一回り大きくなったきがした。
それは、おそらく「気がした」ではない。

「なんだ…あれ…」
呆然と眺めることしか、やることがないのだ
唐突だが、奈留の得意科目は科学である。
それは、「得意」に分類されるには、あまりにもったいないほどの知識量である
。
しかし、その知識をもってしても…

「ありえねぇ…」

思わず言葉が漏れるほど、有り得ない事象を、奈留は今日初めて目の当たりにした。

「浅瀬ぇ…逃げるなら今の内だぜ？まぁ…逃げられないと思うけどな」
マギックを発動すると精神が高ぶるのを感じる。
最高にきもちぃぃぃぃぃ！！はぁはぁはぁ。
因みに理由はもちろんある。

「なぁ浅瀬ぇぇうぇ？人間の肉をよぉ…こー雑巾みてぇに絞っちまったらぁどー
なると思うぅぅ？」
と板垣　垣根は雑巾を絞る真似をしてケラケラと笑い出した。
気持ちわりっ…。

「血がよぉ！穴からプシュって出てな？それでもぉー絞るとぉぉぇお？」

許せねぇな…
こんな気持ち悪い奴が…

「肉がブチリって、そりゃ美味そうにきれんだぁぜぇぇぇぇ?焼きあがった、ソーセージを手でへし折るみてーによぉぉぉっアヒャヒャヒャヒャヒャヒャ、!!」

こんなゲスが…。

板垣　垣根は、恐ろしいスピードで一人の武装した兵隊の懐に飛び込むと、パンチを一発鳩尾に入れた。
「っげぼぉぇえ……っ!?」
と殴られた兵が、口から吐瀉物と、紫と赤の中間ぐらいの色をした、「何か」を吐き出した。兵士が何の衝撃もなかったかの如く、後ろに吹っ飛ばないのは、板垣　垣根が背中に手を回して、上手い具合に衝撃を流しているからである。
兵士は、目をグルリと上え向けると、そのまま膝をついて板垣　垣根に寄りかかるようにして倒れた。

その光景を見て吐かなかった奈留は大したもの…というわけではない。
ただ単に、感覚が麻痺しているのだ。
あまりに衝撃的なことが起きて。

「ククククク…アハハハハハハハハハハハハ！！…はぁ、、あぁ…っと、仲間を殺
しちまった」
板垣　垣根の精神が、情緒が一瞬安定した。
狂気の色に染められた顔が、「普通の顔」に一瞬戻った。

こんな、クズがぁ！

「番号００７、ボディアーマ。アンタ、そいつの製作者が誰だかわかってて、私の前
で使ってる…？」

ゾッとした。
あの、よくわからないチームのリーダーみたいな奴の行動では吐き気を覚えたが
、この金髪ねーちゃんの言葉には恐怖を覚えた。
もちろん、奈留は板垣　垣根に恐怖を抱かなかったわけではない。
ただ、単純な恐怖なら、　燦のが上回っていた。ということだ。

「あァ…わかるはずねぇだろが…オバカですかァァァ？、ただ、テメェが逃げた
出した研究所から、てきとーにぃ……もってきただけだからな」
最初と最後でテンションが違い、気持ち悪さが三割り増した気がした。
言葉や、手のアクションの変化より顔の変化が気持ち悪いのだ。
ニパァァと口を裂くような笑顔を見せたと思うと、まるで潮が引いていくように
、真顔に戻る。感情の満ち引きが激しいのだ。

「あぁぁ…んなら、覚えておきなさい…」
「あ〝？」
「ソイツぁねぇ…」
「奈留が作った、マギックなんだよぉクソッタレェがぁ！！テメェ、マギックど
こに入れやがったぁぁあ！？」
燦がいきなり怒鳴った。
その怒声にビクンと奈留の身体が反応した。

板垣　垣根は、ふぅーやれやれ　と重たいため息をつくと一
ニヤリと口を裂く笑顔をみせ、トントンと挑発するように、右腕の
中心部分を人
差し指で二回、軽く叩いた。

「テメェの右腕は、もらうわよーん…、もぎ取ってでも…ーー」

「ーー回収する」

3章：狂った科学者？怒ってる。（後書き）

どうでもいいですけど、浅瀬　燦の名前の由来についてお話しましょう。

浅瀬　これは適当です。すいません。
下の名前は最初、酸にしようと思ったのです。
でも、あまりにもこれは「ないだろ（笑」ってことで、変換変換変換、んで燦に行き着きました。
燦々と輝く、女性になってほしーなー、という意味は一切こめられていません。

そーれーと、マギックに関してはー、次説明となる、、予定です。
次かその次か、、うーむ。めんどくせ、、。

最後まで読んでくださった方、感謝です。
貴方に、幸が訪れますように。
きっと、１００円拾います。

そういや…後書きって何書くんですかね？ｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6064o/

フラスコの魔法使い

2010年11月11日23時58分発行